

## 香川県と北海道移住

中村 英重

## はじめに

香川県は北海道移住に関してみると、移住数は決して多くはないが、府県別の順位でみると常に一〇位から一五位の間をしめる中位県であったといえる。それ故、あえて香川県と移住の関係をモノグラフとしてまとめる程の高い評価は与えられないかもしれない。事実、香川県からの移住団体でも向洞爺移住団体、香川県移民奨励会がやや知られている程度であり、団体数自体も実に僅少である。資産家や有勢者が大農場を開いた事例も稀で、旧丸亀藩主京極高德が空知郡沼貝村（現美唄市）と虻田郡東倶知安村（現京極町）に開いた京極農場、本稿でもとり上げる小西甚之助、弥七郎などが空知郡栗沢村に開いた小西農場の二例ほどである。このような関係もあつてか、移住史研究において香川県は目立った存在ではなかった。これに対し東隣の徳島県は移民数、「資本移住」も顕著な点があり、研究上に著しい進展<sup>(1)</sup>がみられている。

しかし香川県の場合には、他県にない注目すべき点があつた。それは本稿でも詳述するように、第一には西讃の那賀、多度、三野、豊田の四郡役所により設置された北海道移住民周旋会<sup>(2)</sup>、県内の政財界の有力者を糾合しさらに県庁が後援してつくられた香川県北海道移民奨励会があり、明治二十年代前半の早い時期から全県あげて北海道移住

への取り組みがみられたことである。これは他の府県ではみられない独自の活動であり、移住史研究の上から高い評価を下すことができる。第二には、第一の点とも関連をもつが、やはり明治二十年代前半から徳島県とならび県内に異常なほど「移住熱」がみなぎっていたことである。それが結果的には県内、道内に様々な社会問題をもたらしただが、早熟的な移民創出の点で先駆的な役割をはたしたことも見逃せない。

わたしが香川県が移住史研究の上にて、上記二点の特質があることを認識する契機となつたのは、明治二十四、五年にかけ北海道毎日新聞社が全国にむけ記者二名を派遣してすすめた移住勧誘事業の調査<sup>(3)</sup>であつた。記者二名の活動は、保存紙の関係で多くの欠落があつて全貌は明らかでないものの、北海道毎日新聞に掲載された「遊説日誌」（三〇回分が残存）で詳細にすることができると。特に徳島、香川県の部分が実に詳細である。それは両県が当時、深刻な移住問題に直面していたことも原因となっている。

これが契機となり香川県に対するわたしの移住史的関心は高まっていったが、その後史料的にも『香川県統計書』に収載されている県内の市郡別の移住統計を得て、移民送出をめぐる地域間の比較研究ができるようになり、以下の諸理由と共に香川県の北海道移住のモノグラフをまとめる動機となつた。諸理由とは他に、（一）先述の移住民周旋会、移民奨励会に関与した大久保謙之丞の資料が一書にまとめられていた

こと<sup>(4)</sup>、(二)小西農場の管理・経営に従事していた小西和の資料が保存<sup>(5)</sup>されていたこと、(三)香川新報を明治二十二年から二十六年まで調査し、新聞報道から県内の移住動向をある程度把握できたことである。このような史料収集状況のもとで、本稿はなりたっている。

香川県の移住関係の研究は、桑原真人が商品作物の衰退と移住増大の視点をもとに、徳島県とあわせて香川県を事例に分析したものが唯一である。『讃岐移民団の北海道開拓資料』も、解説の部分で向洞爺移民につきいくらかふれている。『香川県史』(第五巻、通史編近代Ⅰ、昭62)は、「北海道移民と屯田兵志願」の項をもうけているが、北海道移住については先書を祖述する程度であり、『殖民公報』に掲載された諸種の貴重な分析・統計を参照しておらず、『香川県統計書』に収載されたデータすら見落しており、きわめて不十分な内容である。研究状況は以上の通りであり今後待つところが大きい。

かつて永井秀夫は北海道の開拓・移住の問題を究明する上で、「巨視的には日本資本主義成立期の農村分解の態様や地域的人口構成の見通しを得」ること、「微視的には移民送出各府県の状態と移住者の実態に関する個別的調査が必要」なことを提言<sup>(6)</sup>した。北海道の移住史を新たに構築し広いパースペクティブをもつためには、永井の提言は重要でありいままなお有効性を失っていない。わたしは永井提言の後者をうけつぎ、これまで個別の県を単位としたモノグラフ<sup>(7)</sup>をまとめてきた。この点で本稿は、わたしがすすめている一連のモノグラフ作成の一作業の意味をもっている。

以下の本稿の構成を説明しておく、第一章では明治二十四、五年当時、香川県内にひろがっていた「移住熱」が、「無断渡航」「密航」となり大きな社会問題となった様相や諸原因を紹介する。ここでは徳島県も同様な状況を示している、あわせて紹介していくことにする。また移住民周旋会についてもふれていく。第二章では移民奨励会の活動を取りあげる。第三章では県内諸郡の移住数を比較した上で、

移民送出の背景となった生産構造の問題を分析することにする。

## 一 無断渡航と密航

明治二十四、五年の両年にわたり香川、徳島の両県から多数の移住者が来道したが、これは多くが移住周旋業者、回漕店の募集にかかるものであり、県庁の許可を得ていない為に「無断渡航」「密航」と称されていた。

まず二十四年の徳島県美馬郡地方の移民四五一名が三月二十四日に小樽港に上陸した。このうち一四三名は鎌田茂吉の領導で札幌郡琴似村新琴似(現札幌市)、二七名は佐藤友太郎により石狩郡当別村、四名は余市郡仁木村へ入植の予定であったというが〔北海道毎日新聞、明24・3・28、以下道毎日と略記〕、「道庁においても斯く多数の移民なるにも拘はらず同県庁より何等の照会もなきは甚だ不都合」(同、3・26)としているように、予め土地貸付を得ている移民ではなかった。さらに二十七日に今度は那賀郡の農民が余市郡仁木村木村嘉長<sup>(8)</sup>の誘導で着港したと報道され(3・29)、この年は五回にわたり三千余名が移住したようである(4・17)。これらの移民は多くが周旋屋の募集になるものであった。周旋屋は移民から一人当り五円の渡航費を徴収するも船会社とは三円五〇銭で契約し、さらに移民から土地貸下出願の手数料として九〇銭を徴収する「商法主義殖民家」(4・12)であった。徳島県には当時この種の周旋屋が多く、問題となっていた。後述する北海道毎日新聞社が派遣した移住勧誘員が二十五年一月に徳島県庁を訪問した折、県庁官吏はこの件につき以下のように述べている〔明25・2・13〕。

近來県下移住熱の起るに乘じ所謂周旋屋なるもの各村を奔走して頻りに北海道の遺利多きを説き、一たび北海道にさへ渡航すれば勞せずして富を致すべしと唱へ、愚民を誘惑して只管不正の利益を貪らんとするもの多く、又た回船問屋の如きも暗に渡航を誘

導して周旋人と利益の分配を謀るものなり。是に於て乎小民の租税を怠納するもの又は地主に負債あるものは続々密航を企て、当局者も殆ど其処置に苦しむ場合なれば此の際北海道の事情を明かにし、一方には不正の営業者が利を貪ほるの道を杜絶し、一方には善良着実なる移住者を奨励すること真に今日の急務なりと語れり。彼の昨年小樽及び室蘭等の上陸し一時非常の困難を極めたる渡航者の如きも、前述の詐偽手段に歎かれて故国を離れたるものなりとぞ。

ここでは北海道のことにつき無知な県民に対し、「遺利多き」ことや「勞せずして富を致す」などのあらぬデマを吹聴し誘惑する周旋屋の実状が語られ、回船問屋も同調していることも述べられている。道毎日の移住勧誘員も、

目下徳島市中には移住民取扱所坏いへる看板を掲げあるもの数ヶ所あり。又た彼の誘導者及周旋料目的にて各地を徘徊し何郡には百何十戸、何郡には何百戸と数箇の移住団体を組織するもの少なからず。然るに小民は周旋人の術中に陥りて尚は怪まざるのみならず、却て当局坏の注意を厭忌しつつあるもの実に数百戸数千人の多きやに聞けば……

と記し〔同、2・21〕、周旋業者の横行ぶりを伝えている。この種の「詐偽」に簡単にかかり移住応募者が続出したのも、それほど「租税の怠納」「地主に負債」をもつ窮迫した人々が多かった為であり、移住に結びつく要因が種々存在していたからに他ならない。また異常なほど北海道に対する幻想があり、それにあおられた「移住熱」が生じていたのである。

このことは香川県でも同様であった。二十四年の香川県の場合、三月十二日に四七四名の移民が多度津を出港〔香川新報、3・19〕、二十一日に室蘭港に到着した。室蘭郡役所の調査によると移民数は一五〇戸、四五九人とされている〔道毎日、4・17〕。これらの移民は主に向

洞爺に入植する北海道移住民周旋会の募集にかかるものであったが、室蘭郡役所では「輕挙移住の不可なる旨を答へて其の出発を差止めたるも、彼等は準備略ぼ整ひたりとて聞入れず已に本国を出発」し、移民を受け入れる郡役所も対応に混乱をきわめることになった〔道毎日、4・17、18〕。

募集にあたった北海道移住民周旋会は十九年に那賀、多度、三野、豊田の西讃四郡役所が創設した移民送出機関であった。翌二十年四月に元那賀・多度郡長であった三橋政之が二戸八九人（七六人ともいう）を引率して初めて洞爺村に移住した。この移民及び周旋会につき北海新聞は、「洞爺移住民」と題し以下のように述べている〔明20・5・6〕。

胆振国虻田郡に洞爺と云ふ曠原ありけるか、今度愛媛県移民十九戸差当移住せしと云ふ。元来愛媛県讃岐国は人口稠密にして産業の途なきにより年々窮迫の淵に沈もの多く、実に其惨状見に忍びざるほとなるを、旧丸亀藩領地那賀多度の両郡々長豊田元良、三野豊田郡長長谷川誠一郎の両氏は深も前途の成行を憂ひ、両氏の発意にて郡内戸長有志者を説き、毎年一戸長役場区域内より最も強壯勤勉にして成功の見込あるものを択び、当道へ移住せしむる方法を立て、漸次一県内へ及す目的なりと。

この報道に続けて十九年に四郡内の戸長（野田、中津海）が来道し調査をおこなったことが述べられているが、周旋会は四郡の郡長に発意され戸長・有志者の賛同を得ておこなわれた官民一体のものであり、移住者には郡費からの補助が出されたようである。管理者・団体長となった三橋政之もこれに参加し、また二十四年の移民募集にあたった三野郡財田上村外一ヶ村戸長の太久保謙之丞は、北海道移住民周旋委員<sup>9)</sup>であった。

向洞爺移民については各種の資料・報道<sup>10)</sup>からまとめると以下のようになる。十九年に周旋会の戸長二名が来道して調査し、向洞爺・ケ

表1 明治24年の香川県移民

三	野	郡	351名
財	田	村	166
神	ノ	田	125
二	麻	宮	9
勝		間	10
大		見	2
仁		尾	7
比		地	15
本		山	2
上	高	野	1
			14
豊	田	郡	39名
辻	ノ	村	19
一		谷	3
豊		田	4
中		姫	4
和		田	12
那	珂	郡	61名
十	郷	村	8
神		野	19
六		郷	4
土		居	2
他	7	ケ	28
多	度	郡	2名
善	通	寺	2
鶴	足	郡	2名
造	田	村	2
香	川	郡	10名
安	原	村	10
徳島県三好郡			7名
昼	間	村	7
合		計	474

出典、「香川新報」明治24年3月19日

ツブネ・ホロノツブの三ヶ所に一四万坪の地所を得、二十年に二一戸八九人(七五人)、二十一年に九戸四〇人が入植した。移住者は四郡の中から資産金百円以上を有するもの(不足の場合は周旋会から補助)で、しかも「強壯勤勉にして成功の見込あるもの」が選ばれていた。二十三年にも一八戸七二名が移住している。

さて二十四年の移民は周旋会による第四回の移民にあたる訳であるが、この募集者・主唱者は周旋委員であった大久保謙之丞によるものである。彼の募集活動及び移民の出発の模様については、香川新報に詳細に報道されている(明24・2・26、3・13、19)。この時多度津を出発した四七四名の村別の内訳をみると表1の通りである。これによると三野郡が三五一名と圧倒的に多く、しかも大久保謙之丞が戸長をつとめた財田村が一六六名、同村の西隣である神田村(現山本町)が一二五名となっており、両村が大部分をしめている。ついで那珂郡六一名、豊田郡三九名であるが、多度郡は二名と少ない。二十四年の移民は大久保謙之丞が中心となつて募集したことを反映し、四郡から満遍なく出されていた訳ではなく、三野郡しかも財田・神田村が主であったことがわかる。移民の出発に際し柴原和県知事ほか県庁官吏・郡長などから移民団へ餞別品が贈与され、県庁公認の移住であつたにもかかわらず、道庁に対しての連絡や事前の地所処置が全くなされていなかった為に、この移民団もやはり「無断渡航」であつたといえる。

明治二十五年も徳島、香川県からの無断渡航、密航が頻発した。まず徳島県からみていくと、この年は徳島の小西回漕店(小西弥平経営)、及び弥平の子息寛吉、平八郎が札幌に開設した支店(小西商会)<sup>10)</sup>が募集したものもある。小樽に着港した人数をみると、①三月四日に七〇〇余名(道毎日、明25・3・6)、②七日に二二八名(小西商会の特約移住民数一八四名(3・10))、③十八日にも那賀・三好郡から七〇〇余名が到着したが、徳島からは一三〇〇余名が乗船し六〇〇名余は函館で下船したという(3・24)。続いて④二十一日に一一三名(特約移住民八三名(3・27))、⑤二十五日に四七九名(同三二六名(4・2))となっており、膨大な移民数であつた。このうち小西商会の特約移民は②④⑤で総計五九三名となる。行先別の内訳を総計すると沼貝五九名、余市・仁木一六五名、忍路(現小樽市)一二六名、石狩八五名、篠路・興産社九四名(現札幌市)、札幌村六二名、その他二名となっており、いずれもこの時期に徳島県出身者により開墾が進められている所である。小西商会は移民と農場主などの相方から斡旋料、船会社からも割引料などを徴収していたものだろう。①も小西商会が周旋することを伝え、移住は空知近傍という。おそらく炭山か鉄道工事の夫に周旋したものだろう。小西平八郎は道毎日が派遣した移住勧誘員に協力して活動をおこなうなどしており、移住民周旋業の代表的な一人であつたといえる。小西回漕店では明治二十三年から三十八年迄の間

に約五万人の移民を回漕<sup>④</sup>したというが、大部分は周旋を含むものであったろう。三十一年におきた依姫丸事件<sup>⑤</sup>は、定員七六〇人のところ三〇〇〇余人を乗船させ、航海中に十分な食料・飲料水を供給しないなどにより八名が死亡した移民虐待事件であったが、この移民は小西回漕店の募集になるものであった。

一方、香川県でもこの年は周旋業者による移民が増大し、しかも「無断渡航」「密航」として大きな社会問題となったのである。香川県では西讃地方に移住計画をもつ農民が多いことから、三月四日に軽挙の移住を戒める県知事の告諭が布達されたが〔香川新報、明25・3・4〕、既に二月二十六、七日に三艘の船で一二七二人もの移民が北海道に向け多度津を出港していた〔同、3・9〕。香川県庁や大規模な移民送出を計画していた北海道移民奨励会では道庁あてに「無断渡航」の旨を打電していたが、一団は三月四日に室蘭に到着する。今回の移住者も豊田・三野郡の人が多く、

北海道には目下大工事ありて人夫を要すること甚だ多く、又誰れにても望みの地所は千坪一円を以て払下げられ、生計至て容易にして工事と農業に従事さへすれば忽ち相応の資産家なるよし……

というデマを周旋業者から吹聴された人々であった〔道毎日、3・9〕。この年北海道移住民周旋会では前年の失敗に鑑み、移住者の送出は停止されていた（大久保謙之丞も二十四年十二月に没）。この移民は約三五〇名が幌別（現登別市）・厚真、約二五〇名が向洞爺・長流（現伊達市）、七〇名が夕張地方の目的地をもっていた他はあてのない移住であった〔香川新報、3・24〕。三〇〇名ほどは、「全く極貧のものにして、中には一泊の旅用たに用意なく空しく室蘭港に彷徨し、頗る惨状を極め餓渴に迫る<sup>⑥</sup>」といわれた惨状を呈していた。周旋をおこなったのは幌別に移住経験のある鈴木又四郎（那珂郡出身）といわれ、途中で逃亡している。香川県ではこの惨状が伝えられた<sup>⑦</sup>あとも移住者が続出し、北海道移民奨励会では各地を巡回して無謀な移住を抑止す

る演説会を開き<sup>⑧</sup>、警察・県官吏が出港者に説諭を試みる<sup>⑨</sup>こともおこなわれていた。香川新報でも「北海道移住濫発の防禦」の論説を掲げ〔3・15〕、「近日の如く頼に移住熱の下流社会に流行し」「頑是なき妄想を以て渡航を企つるもの」に、警告を発していた。香川県内はこの年空前の移住ブームとなっており、道毎日の移住勧誘員が宿泊した多度津の塩田旅店は回漕業を兼ねていたが、春期の渡航申込予約は三〇〇〇人をこえていたといわれる〔道毎日、明25・3・5〕。

以上のように香川、徳島県では二十四年以降から「移住熱」がさかとなり、大量の移住者を送出してくる。道庁統計<sup>⑩</sup>の移住者数を見ると二十四年は徳島県が三五戸一六二七人で府県順位では第四位をしめ、香川県は五〇戸二二人にすぎない（一九位）。二十四年までの統計は本籍を移した転籍者のみの数値であり、二十五年からは寄留者を含めた数値にかわり、二十五年は徳島県が四一〇戸一九三六人（第八位）、香川県が三八六戸一四三八人（第一位）となる。しかしこれらの数値は先の報道の人数からみると実態を反映していず、転籍・寄留者を出さない移住者や出稼人が多数いたことがうかがわれる。しかも徳島、香川県の移住数は府県の中で中位から上位をしめ確かに多かったが、無目的の大量移住で社会問題となったのは両県の移民に限られている。これはひとえに周旋、回漕業者による悪辣な勧誘の結果ともいえるが、また一方ではこの当時、両県内では官民あげての移住問題への取り組み<sup>⑪</sup>がみられていた。これは他府県にみられない両県の特徴であったと指摘できる。これが「移住熱」を倍加させたのは皮肉であったが、次にこの動向につき香川県について詳述していこう。

## 二 香川県北海道移民奨励会

香川県には前述したように西讃の那珂・多度・三野・豊田郡に創設された北海道移住民周旋会があり、明治二十、二十一、二十三、二十四年と四回にわたり向洞爺へ移民を送っていた。この会の活動が注目

され、さらに全県規模でおこなう目的でつくられたのが香川県北海道移民奨励会であった。

同会は二十四年七月二十二日に開かれた「北海道移住奨励に関する有志会議」をもとに結成された（香川新報、明24・7・24）。会議に先だち有志者募集の為に発表された、県知事あての「北海道移住者奨励事件に付建議」（同、7・8・10）に、移住奨励の趣旨と移住送出をはかる必要のある香川県の状況がよく述べられている。それによると当時香川県は戸数一三万六八七七戸、人口六六万〇四八四人を数え、一方里あたりの人口密度は五八一九人となっていた。これは東京、大阪の二府につぐ人口密度であり、諸県の中では第一位であった。これにもかかわらず香川県は、

物産事業の対照に於ては却つて他府県下の下位にあり。故に住民常に産業の欠耗に苦しみ為めに疲弊の状況は年一年より甚きを感じる也。夫れ或は農を力めん乎、耕地既に余剰なし。或は工を強めん乎、確然実業の雇主に乏し。或は商を励まん乎、金融壅塞を奈何せん。

と人口過剰で耕地に乏しく、「物産事業」のない県内の状況を指摘している。さらに、「県下に偷安萍徙し剩へ不善非徳の作業を働」らく、「無業の貧民」「犯罪の悪徒」が県下人口の千分の一にあたる一二〇四人（二十一年在監者数）もいることを述べ、「自治安寧の道を保つ」ためにも、「県下無業の人民を勧誘し北海道未開の地へ移住せしむる」ことが必要だと説いている。また移住者が増大するにつれ、「県下衰頹の困難を医し不良民を減殺するの実功挙げ」とも述べられている。

以上の「建議」から当時香川県において人口の過剰、物産事業の不振、無業人民（貧民、不良民）の処理が深刻化していたことがわかると同時に、それが「建議」には危機感となつて表出されていた。「建議」からうかがえることは、香川県にとり移民の送出・奨励は県勢の再生に必須であり、振興に不可欠な当為と認識されていたことである。「建議」にも、「此の余れるものを以て彼の不足を満たし、彼の富地を得て

此の貧地を補ふ」という「一挙両全の得策」、あるいは「富国強兵の策」と謳われているが、やはり前記の県内事情から移住を促進せざるを得ず、右の認識となつてあらわれたのである。

北海道移民奨励会では毎年五〇〇〇人の移民を送り、一人につき二円五〇銭の補助（総計一万二五〇〇円）、移住者の誘導・監督費、小屋掛料など一万九九五円を計上するプランを作成していた。七月二十二日の創設会議、二十三日の委員会を経て会規則が作成されたが、規則によれば同会の目的は、「香川県民をして北海道に移し、一は讃岐住民の前途を安全にし、一は親愛なる同胞移民をして金穴を占領せしめんとするにあり」（明24・7・24）とされた。会の事務所は高松市大字三番丁の商工会議所内に置かれ、役員は次の通りである。

会長―揚行蔵 副会長―塩田時敏 会計係―細谷宗次郎 理事―高橋良平・入江太郎吉・石井文太郎・菅原道・七條伊六・三木始  
その後八月にいたり同会では副会長塩田時敏、理事石井文太郎（県会常置委員）、県属宇喜多秀穂の三人を北海道へ調査の為に派遣する。派遣員の報告は香川新報に掲載されているが（明24・9・5、8）、一行は札幌―洞爺―十勝―北見を視察し移住地所を十勝に決定して十月に帰県している<sup>40</sup>。十一月十二日に報告会も開かれ（香川新報、11・13）、さらに十二月に「北海道移民奨励会奨励要旨」も頒布され（同、12・13・22）、活発な活動をみせていく。

副会長の塩田時敏は北海道視察の経験をもとに地元のア野郡滝宮村（現綾南町）をはじめ、周辺村にて移住の勧誘をおこない、一月中旬に一六、七戸あるいは六、七〇名の移住志願者を得たという（香川新報、明25・1・13、20）。また北海道毎日新聞社が派遣した移住勧誘員による演説会が、長尾町（二月三十一日）、高松市（二月一日）、坂出町（二日）、丸亀町（三日）、観音寺町（五日）の五カ所で開催された折も、同会は県庁と共に協力をおこなっていた。前述した「無断渡航」「密航」問題が発生すると、その防禦の為に県内各地で演説会を開き、無謀な

移住を戒めると同時に、あわせて同会の移民募集の勧誘につとめていた。そして同会が募集した阿野・鶴足郡の移民一二戸六〇名が、いよいよ四月二八日に北海道へ向け坂出港を出発する〔同、4・30〕。一団は十勝国中川郡止若原野の蝶多村（現幕別町）に入植したが、出発後に北海道移民奨励会は移住事業の蹉跌をまねく事態に直面することになった。

この年の四月に開かれた県会臨時会にて北海道移住民補助費として一カ年一五〇〇円を、県費より支出することが可決されたものの、内務省では移民保護を地方費で支弁することを認めず、補助費は不認可となったのである。さらに十一月の県予算にも補助費が計上されず、奨励会の移住事業は全く見込みがたなくなり、翌二十六年四月に第二回移民としてわずかに一二戸を同郡の猿別原野に送るのみにとどまった。

二十五、六年の移民がどのような状況となったのかについては諸資料に詳細な記載がある。その中でも当時札幌農学校の学生であった小西和（和太郎）が、二十五年七月中に胆振、日高、十勝国を旅行し、その紀行文が「北海道旅行日誌」として香川新報に六八回にわたり掲載された〔明25・8・30～明26・1・21〕。その中で二十五年の移民の状況につき第三九回から第四三回〔11・6～11・18〕までを報告にあてている。それによると当初は、

移民等は朝夕故国の天を望み日夜旧知の情を思ひ、敢て土着の念慮を起さず。自ら其身本道に渡航せしの不幸を歎じ、稍もすれば奨励会を攻撃し互相間を離散せんとす。

との状況であったという（第四一回、明25・11・13）。しかし移民取締となった阪本已之松の指導を得、開拓の進捗と共に移民の「悪感情は自然に消滅」（第四三回、11・18）したという。阪本已之松の経歴については不明だが、二十四年に道内を旅行し、「北海道漫遊見聞略記」を香川新報に寄稿しており〔明24・7・4～7〕、その経験がかわれて移

民取締に選ばれたと思われる。

小西和は二十九年三月にも釧路、十勝国を旅行し、やはり「北海道旅行日誌」として香川新報に旅行記が二五回にわたり掲載された。ここでは二十五、六の兩年の移民について紹介されている。それによると二十五年の移民は一一戸おり、「懇成地五十余町歩に達し隣保相輔け苦楽相分つる美習あり、和氣霽々（あいあい）の間各自其業務に勉勵する」（第二二回）とされているが、二十六年の移民は七戸にとどまり、幕別市街に近い為に「移住渡航の素志を變じ着実に鞏固（けんこ）なる農耕の業務を輕視」（第一七回）て、商業活動に走っていることを批判している。二十六年の移民は福家締吉が取締となるも離散が多かったのであった。

香川県北海道移民奨励会は二十七年八月に解散となり、移民もわずかに二四戸を送るとどまり、しかも入植地はまだ殖民地の解放がなされておらず「無願開墾」の状態などで、決して成功したとはいえなかった。だが香川県から開拓早々の十勝原野に入植者を送ったことは、二十七年以降の殖民地解放にともない後続の香川県からの移住者を招致する重要な原因となった。その点では向洞爺の移民と並び、香川県からの北海道移住を考えた場合、大きな役割をはたしたともいえる。

福家締吉から移民奨励会あてに送った書状では、

移民は何づれも大に将来を相楽み、是非とも来春までには自分々々の親戚又は朋友等呼び寄せんとて、過日來皆な郵便を以て右の旨を郷里へ申遣はし候次第……

と述べ（香川新報、明26・10・5）、移民たちが郷里へ呼び寄せの郵便を出していることを報じ、あわせて第三回目の移民送出を進言している。この呼び寄せによるものか、あるいは同会での勧誘によるものか不明であるが、二十七年には五七戸が同じ止若・猿別原野に入植したという。さらには中川郡の蝶多・幕別・止若・咄別・白人村（以上、現幕別町）の農家千余戸のうち、香川県出身者は約二百戸をしめていたといい、移民奨励会が結果的に及ぼした影響には、やはりみるべき

ものがあつたと評価できる。

もうひとつこの時期、香川県からの北海道移住を考える場合みのがせないのは小西和<sup>④</sup>の活動である。彼は札幌農学校在学中から北海道開拓の重要性、香川県民の北海道移住の必要性を認め、父親の弥七郎（寒川郡長尾村）及び一族の甚之助（当時衆議院議員）・達三郎を説き、小作経営による北海道開拓組合小西農場を開設<sup>⑤</sup>したのである。場所石狩国空知郡栗沢村で、ここに二十六年三月に七九六二一四坪の貸下げ許可を得、四月から小作を誘致して開墾に着手した。小作は二十六年に一二戸五九人、二十七年に三〇戸一四四人、二十八年は八、九戸で四七人を誘致し、小作も郷里の小西家で「小作に従事せし者若しくは其子弟親戚朋友を限」ったという。小西和は実際に農場を経営するかたわら、香川新報に北海道通信・札幌通信を寄稿し、北海道の情報を送り、また移住の勧誘につとめていた。二十九年三月に寒川郡小田村（現志度町）の小川久三郎ほか四名にて香川県殖民社の設立計画が伝えられ、地所の六五万坪の貸下事務を小西和に委託し、十勝国に選定する報道もあつたが（香川新報、明29・3・13）、これは実現をみずに終った。おそらくその地所を利用して小西は、十勝国中川郡大樹村藻岩に第二農場を開く予定をたてるも（同、明30・12・4）、明治三十一年九月の全道を襲った大洪水により栗沢村の農場が壊滅的な打撃をうけ、農場も三十四年に手離し北海道からも去ることになった。

表2 香川県の移住数(明25-大5)

年	戸数	府県順	戸口数
25	336	11	1,438
26	360	12	1,573
27	445	10	1,794
28	956	7	3,678
29	659	7	2,504
30	427	10	1,602
31	536	8	2,099
32	250	14	988
33	358	11	1,399
34	395	11	1,434
35	284	13	1,061
36	249	13	896
37	287	14	1,046
38	287	14	1,099
39	432	13	1,506
40	455	13	1,715
41	480	13	1,851
42	342	14	1,304
43	276	14	821
44	385	14	1,238
大1	350	14	1,202
2	371	14	1,291
3	278	15	848
4	341	16	1,178
5	316	14	1,170

出典「北海道重要統計表」(大7)

小西の活動期間は短かったが、はたした役割は大きく評価すべき人物である。

### 三 移住送出の要因

表2は明治二十五年から大正五年まで二十四年間にわたる移住数を示したものである。数的にみれば明治二十八年が九五六戸三六七八人と最も多く、ついで翌二十九年の六五九戸二五〇四人となっている。府県別にみた移住戸数の順位では両年とも第七位となる。全体からいうと二十七年から三十一年にかけて最初のピークが認められ、この時期が香川県における北海道移住の最盛期であつたと評せられる。この盛興をもたらした大きな要因は団体（結）移住<sup>⑥</sup>であつた。二十八年に石狩国上川郡旭川村、天塩国苫前郡苫前村に香川団体が移住した。前者は豊田郡出身者が中心で、この年同郡から七四戸三二人が旭川村へ移住<sup>⑦</sup>している。後者は正式の団体移住ではなく、二十六年から三十一年にかけて三野・豊田郡から入植した模様である（二十八年まで計三戸が移住<sup>⑧</sup>）。二十九年には後志国虻田郡真狩村に三二戸一二八人の讃岐団体（団体長、横山寅吾<sup>⑨</sup>）、三十一年には十勝国上川郡屈足村（現新得町）にも讃岐団体<sup>⑩</sup>が移住している<sup>補注</sup>。

以上の団体（結）移住のほかに、農場の小作移住も進展した時期であつた。特に石狩国雨竜郡雨竜村に本場をもつ蜂須賀農場では、場主の蜂須賀茂韶が旧徳島藩主であつたこともあり三十、三十一年にかけ徳島県をはじめ、隣県の香川県、兵庫県淡路島でも小作の募集をおこなつた。『北海道農場調査』では八二〇戸の小作のうち、香川県出身者は一一戸の多きをしめていた。また雨竜村関係では六三人の本籍判明者のうち、綾歌郡二九人、香川郡一八人、木田郡一六人、三豊郡一人<sup>⑪</sup>となっている。しかし一般的にみると香川県出身者が多数で農場小作となっているケースは少ない。ただ目立って多いのが洞爺湖周辺の農場である。この地域の諸農場に香川県出身者が集中的にみら



れる。『北海道農場調査』をもとに、香川県出身者の多い農場を示すと以下の通りである（上段：小作総戸数、中段：香川県出身戸数、下段：割合）。

胆振国虻田郡虻田村			
加藤子爵別邸地	三五戸	二五戸	七一%
高平農場	九五戸	二九戸	三一%
同 郡弁辺村			
花園農場	九二戸	一〇戸	一一%
有珠郡壮瞥村			
加藤農場	一八戸	一六戸	八九%
同	三五戸	三一戸	八九%
伊東農場	六八戸	三〇戸	四四%
橋口農場	四五戸	二八戸	六二%
角田農場	一八戸	一六戸	八九%
朝比奈農場	二〇戸	一五戸	七五%
同 郡伊達村			
高橋農場	六〇戸	一五戸	二五%

これらの農場は蜂須賀農場とちがい、香川県内で小作を募集した形跡はない。洞爺湖周辺への移住者を入場させたり、場合によっては呼び寄せを通じて小作に充当していった模様である。だがこれらの農場はいずれも三十年以降に開設・開墾されたものが殆んどで、最初のピークをこえた時期に属している。

最初のピークのあと暫く移住数は低迷するが、日露戦争後の三十九年から四十一年にかけて第二のピークがみられる。このピークは前回にくらべ移住数も低く、大正期に入っても大きな伸びがみられない。これは西日本の府県にみられる移住動向と合致しているといえそうである。

次に県内における市郡別の移住数を見、そこからの郡が移住数が

多く、どのような要因が移住者の輩出にいたったのかを考察してみることしよう。表3は『香川県統計書』から作成したもので、Iは明治二十七年～三十年、IIは明治三十八年～大正十五年の数値をまとめたものである。明治二十年代後半の状況を示すIからまずみると、移住数は豊田郡が多く、ついで香川、三野郡となっており、いずれも人員は千人を越えている。逆に小豆郡は〇人であり、大内・三木・多度郡もいたって少ない。明治後期から大正期の状況を示すIIをみると、最も多いのが三豊郡（三十二年に三野、豊田郡と合併して成立）、次に綾歌郡（もと阿野・鵜足郡）、そして香川、木田（もと三木・山田郡）、大川（もと大内・寒川）の各郡の順となっている。ここでも小豆郡はいたって少く、仲多度郡（もと那珂・多度郡）も多くはない。

『殖民公報』第二二号（明36）の「昨年に於ける香川県の移住」によれば、県内の移住数を地方別にみれば、「東讃（高松以東）約二分、西讃八分、就中西陲の三豊郡は全数の過半を占めり」とされている。これは明治三十五年中（一～九月）の五六三名の実績をもとに分析したものであるが、IIからみると東讃（高松市、大川・木田・香川・小豆郡）は、①では全体の四二・九%、②では四四・七%であり、通時的にみれば正しい指摘といえない。また三豊郡が「全数の過半を占め」る点についても正確ではない。県内からの移住の原因・動機に関しては、

現在地の人口に比して地積狭隘なるにより労働の余力を用ゆるの地なきに困り居るに際し、曾て北海道に移住して成功せる親類及び知人等の好況を報し、頻りに移住の利を説くものあるに依りて其動機を起すもの多し。

と述べ、「地積の狭隘」と呼び寄せをあげている。

同誌第一五号（明36）の「徳島香川二県移住民の景況」は、徳島、香川両県の移住動向を分析した詳細なものである。ここでも綾歌・三豊郡の移住数の多いことを指摘したあと、「其原因は此二郡の既移住者

表3 市郡別の移住数

I 明治27年—30年

市 郡	人 員	戸 数
高松市	1人	7戸
大内郡	85	30
寒川	173	50
三木	89	26
小豆	0	0
山田	350	89
香川	1,154	307
阿野	831	208
鷺足	338	75
那珂	577	170
多度	40	7
三野	1,016	261
豊田	1,347	286
合 計	6,033	1,510

出典 「香川県統計書」(明29.30)

II 明治38年—大正15年

市 郡	①	②	合 計	③
高松市	86人	188人	174人	96戸
丸亀	87	37	124	18
大川郡	670	2,742	3,412	832
木田	1,401	2,138	3,539	1,106
小豆	2	122	124	47
香川	1,679	3,289	4,968	1,208
綾歌	1,767	4,330	6,097	1,598
仲多度	479	1,118	1,597	409
三豊	2,777	4,936	7,713	1,826
合 計	8,948	18,954	17,902	7,140

①は明治38—44年の移住者数

②は大正1—15年の移住者数

③は②の移住戸数

出典 「香川県統計書」(明38—大15)

か北海道の有望なるを説きて移住を勧誘したるに外ならず」とし、呼び寄せ(勧誘)が原因とされている。綾歌郡は香川県移民奨励会、三豊郡は移住民周旋会や旭川村、苦前村の香川団体の移民の故地にあたり、事実、さかんに呼び寄せがおこなわれていたことも確認でき、原因のひとつとして肯定できる点が多分にある。また該記事では徳島、香川の両県にわたる移住の原因に、以下の五項をあげている。

- ① 郷里に於ける生計の困難。
- ② 本道との経済的關係。
- ③ 既移住者の成績。
- ④ 既移住者の誘導。
- ⑤ 本道大農場の小作人募集。

①は農家一戸当りの耕地が狭少(香川県は六反五歩)で、細農の小作者が多いこと、②は北海道へ徳島県から煙草、香川県から食塩、逆に両県へは鯨粕が送られ、「両県は北海道と久しく経済上の關係」をもっていたことがあげられている(③④⑤は徳島県の事例で説明されているが、香川県の事例は既に先述したので省略する)。

続いて同誌第二四号(明38)の「各県移住民の概況—香川県」では、

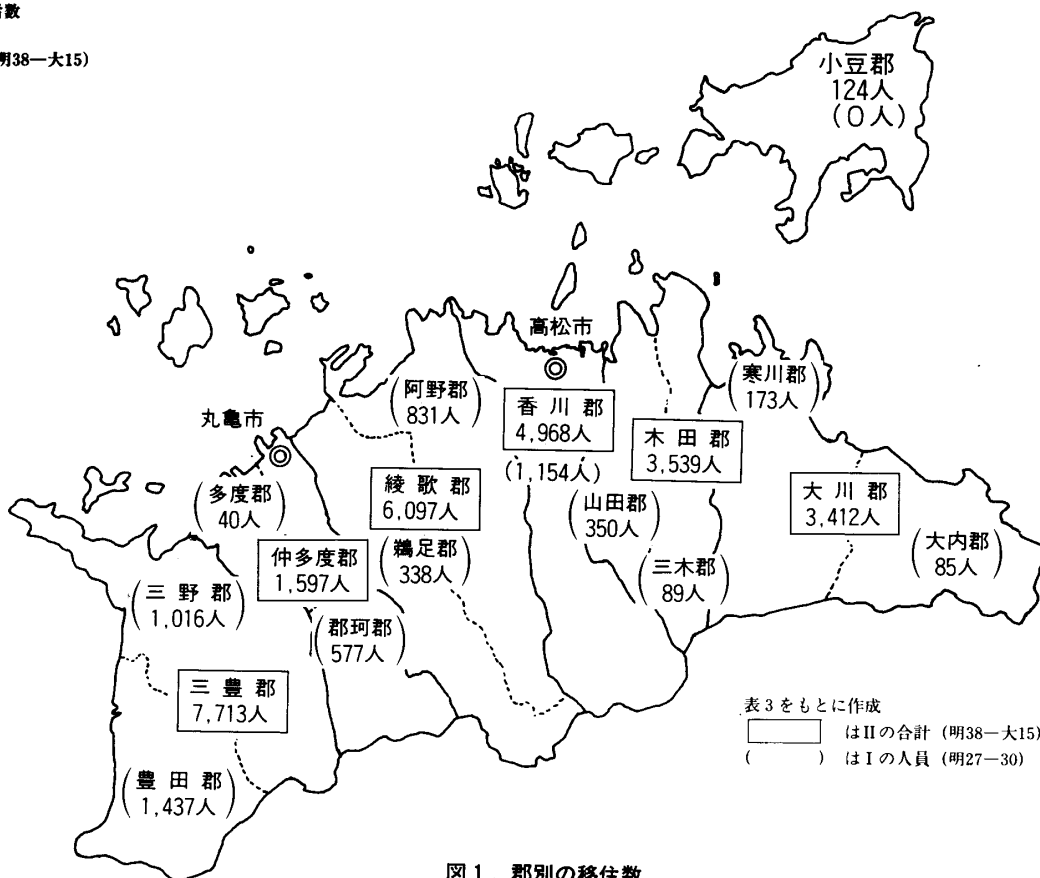


図1. 郡別の移住数

移住の原因につき次のように説明されている。

農業戸口に比すれば耕地面積狹隘にして、小作者及小地積を有する農民は勞力余りありて耕地足らず。従て中等以下の農家に在りては富を致すに由なきに、曩に移住せる者は多くは好成績を得て其景況を報道し、誘引するによりて移住するに至るなり。

ここでも「耕地面積狹隘」と先移住者による「誘引」が再説されている。また移住者の多い郡村として、

木田郡—三谷、西植田村（ともに現高松市）

香川郡—池西、由佐（ともに現香南町）、川岡（現大内町）、川東村

綾歌郡—山内村（現国分寺町）

三豊郡—大野原、和田（現豊浦町）、粟井、柞岡、常盤村

があげられている。なかでも綾歌郡山内村の場合、旧家の岡内栄三、瀬尾芳三郎の移住・誘導により、明治三十七年上半年期に一二一戸、四八二人にも及ぶ移住を伝えている。同誌第三三号（明39）の「香川県民移住の近況」も、原因や動向について分析するが、原因は上記を再説するにとどまっている。

これまで『殖民公報』をもとに、主に香川県の北海道移住の原因・動機をみてきたが、その結果、人口の割合に農地の狭少、先移住者の呼び寄せ・勧誘によるとみてよいだろう。ただし、郡別にみると西讃の三豊、綾歌郡などがなぜ多いのかという原因は、十分な究明がなされていないといえる。そこで表4をもとに考察を加えていくことにしたい。

表4は各郡（市及び小豆郡は割愛）の戸数、人口、農地（田畑）、一戸当り農地、小作率、それに綿、葉煙草、菜種、甘蔗、桑の商品作物、繭産額を明治三十年の統計をもとに一覧にしたものである（商品作物のうち低値は省略）。これからみると移住数の多い三野・豊田（三豊）、阿野・鵜足（綾歌）郡はもとより戸数・人口の多いところであったが、一戸当りの農地、小作率からいえば豊田郡を除き平均値を上回

わるかその前後にあり、決して農家の生産形態が低劣な位置にあった訳ではない。豊田郡のみはやや低劣な位置におかれていたといえるが、豊田郡よりさらに低劣な位置にあった多度・那珂郡は移住数が少なく、

表4 各郡の農業生産と商品作物（明治30年）

郡名	戸数	人員	農地	1戸当農地	小作率	綿	葉煙草	菜種	甘蔗	桑	繭産額
大内	6,508戸	35,304人	2,674町	4.24反	3.15		42町	53町	359町	48町	160石
寒川	9,244	53,474	3,924	4.25	1.83			67	513	36	124
三木	5,509	30,488	2,778	5.04	2.41			78	155	36	
山田	8,121	45,692	4,274	5.26	2.31			77			
香川	14,633	81,733	6,696	4.58	1.77	58町	60	37町		41	
阿野	11,841	63,944	5,751	4.86	1.42	55			114	39	
鵜足	8,802	47,131	4,301	4.89	1.35	25	111	97		31	
那珂	15,714	78,429	4,364	2.78	1.59	68				34	116
多度	6,094	30,488	2,037	3.34	3.23	47					
三野	12,887	67,496	5,715	4.43	1.78	95	21		118	98	306
豊田	11,501	64,178	4,314	3.75	2.36	132	297	20	280	50	221
			平均	4.45	1.66						

出典 「香川県統計書」（明治30年）

生産形態のあり方がストレートに移住に結びついていたとはいえない。だが同じ生産形態であっても作物の栽培、経営形態のあり方が移住に結びつく要因があったことが、以下の事実から指摘できる。

まず表4の商品作物の反別に目を通して判明することは、商品作物を多く作付している諸郡に移住数の多いことである。例えば表3-Iで移住数が最も多かった豊田郡の場合、綿・葉藍・葉種の作付反別が諸郡中で第一位、甘蔗は第三位、桑及び繭産額は第二位となっている。次に三野郡の場合、綿は第二位、桑及び繭産額は第一位である。香川郡では葉藍・葉煙草が第二位である。香川県内では明治二十年代後半に綿・葉種・甘蔗が外国産の輸入におされて衰退期に入り、桑も三十年代に入りやはり衰退していく状況となる。ただし甘蔗は製糖業と結びついており、一気に下落することはなかった。これが甘蔗反別の第一、二位をしめる寒川・大内（大川）郡の移住数が、それほど多くない原因といえる<sup>90</sup>。しかし、綿・葉藍・葉種・桑などは殆ど原料生産に終始していた為に衰退にむかうと栽培農家の打撃は大きく、生活の困窮にむかうことは必至であった。多品種の商品作物を栽培していた豊田郡にその影響が最もつよく、これが北海道移住に結びつく最大の要因であったといえる。

香川県は徳島県と共に農地の狭少さを補う為に換金性の高い商品作物

物を植付け、一方では豊富な労働力を投下した集約農業をおこない、高度な商業的農業が展開したところといえる。それ故、商品作物の衰退は豊富な労働力が一気に「過剰」となる危険性をはらんでいた。両県の移住要因を分析した桑原真人は、徳島県の場合は藍、香川県の場合を甘蔗の衰退とむすびつけ理解<sup>91</sup>している。豊田郡でも葉藍を二九七町も作付しており、徳島県と同様な移住要因とみなすことができる。しかし香川県の甘蔗については、特産地であった大内・寒川（大川郡）が移住数は多くなく、甘蔗の衰退がただちに移住へ結びついたとはいえないようである。

商品作物の衰退と北海道移住・海外移民の関係では、広島県の場合、綿・蘭草・藍などが普及し特に多量の労働力を必要とする安芸、佐伯、沼田、高宮郡の綿作地域が移民送出地帯であったことが明らかにされている<sup>92</sup>。愛媛県は宇摩、周桑の東予の両郡が多かった<sup>93</sup>が、これも西讃の三豊郡など同じ事情が背在していた為と予測できる。

このように商品作物の衰退が移住・移民にむすびつくのは瀬戸内沿岸諸県の特徴とみられるのである。

香川県で三豊・綾歌郡の西讃地方からの移民送出の要因は上記の通りに考えられ、これがさらに呼び寄せ（勧誘）の形態で倍加していったと結論付けることができる。

(1) 注 徳島県の移住史研究には、桑原真人「近代北海道史研究序説」第二章第一節（北海道大学図書刊行会、昭57）、平井松午「徳島県出身北海道移民の研究」（『人文地理』第三八巻第五号、昭61）、「徳島県からの北海道団体移住」（『徳島大学教養部紀要—人文・社会科学』第二二巻、昭62）などのすぐれた研究がある。なお、『雨竜町百年史』（平2）第二章第三節第二項でも、徳島県の移住動向がまとめられている（桑原真人の執筆による）。

(2) 正確な名称が伝えられていないので、本稿ではこの仮称を使用していく。

(3) 中村「移住史研究の課題と『遊説日誌』」（『地方史研究』第二二三号、昭63）。

(4) 大久保謙一・白川武編『讃岐移民団の北海道開拓資料』（多度津文化財保存会、昭56）。

(5) 香川県長尾町の宇佐神社に海南文庫として保存されている。移住関係資料には彼が香川新報に送稿した記事、小西農場の報道記事、新聞・雑誌に寄稿した論説のスクラップがある。本稿で使用する二十七年以降の香川新報の記事は、このスクラップにもとづいている（二十六年以前のの一部についても、保存紙欠号分につき利用）。

(6) 永井秀夫「北海道移住と府県状況」（『新しい道史』第一九号、昭41）。

- (7) 中村「福岡県と札幌移住」(『札幌の歴史』第一八号、平2)・「岐阜県と北海道移住」(永井秀夫編『近代日本と北海道』河出書房新社、平4刊行予定)、その他、「移住と開拓」(『札幌の歴史』第一七号、平1)で山口県、『雨竜町百年史』(注(1)参照)で富山県の動向を分析した。今後ともいくつかの府県のモノグラフをまとめる予定でいる。
- (8) 彼は徳島県美馬郡脇町出身で明治十二年に移住民組長の一人として後志国余市郡仁木町に移住する(『仁木町史』昭43)。その後は仁木竹吉のもとにあつて徳島県民の移住幹旋に従事していたようだ。
- (9) 注(4)書。
- (10) 関説する資料には、注(4)書、「団体移住民概況」・「団体移住之沿革」(北海道大学附属図書館北方資料室蔵)、『殖民公報』第六一号(明44)、報道には道毎日(明22・5・16、11・19、明24・3・10、11・6)がある。この移民については『洞爺村史』(昭51)が詳細に取り扱っており、三橋政之の経歴についても詳しい。彼は俱知安村の京極農場の管理人もつとめた(『京極町史』昭52)。彼の経歴及び移民の沿革については、『移民者成績調査』第二編(明43)にも記述されている。
- (11) 札幌の支店は失敗したことが徳島日日新聞の報道(明25・9・14)からしられる。
- (12) 『殖民公報』第三一号(明39)「徳島県民移住の近況」。
- (13) 事件の内容は、小樽新聞(明31・3・29)に詳細に報道されている。
- (14) 『北海之殖産』第二二号(明25)「香川県移住民の状況」。
- (15) 香川新報、明25・3・9、24、4・9。上記の報道が種々の惨状を伝えていた。
- (16) 同、明25・3・15、17、20、22、24。
- (17) 同、明25・3・10、17。
- (18) 『北海道庁第六回勸業年報』(明25)。
- (19) 『北海道庁第七回勸業年報』(明26)。
- (20) 徳島日日新聞には、国安仁七郎(十勝国中川郡幕別村に南海社を組織。三好郡出身の県会議員)の移民策(明24・12・17、25・1・5)、関義臣知事の移住策(明25・7・10)が掲載されている。
- (21) 一行の来道は道毎日にも報道されている(明24・8・26、29、9・30)。
- (22) 演説会の模様も香川新報に詳細な報道がある(明25・2・3、4、6、9、12、16)。
- (23) 「団体移住民概況」(注(10))、『北海道殖民状況報文—十勝国』(明34)、『移住者成績調査』第一編(明39)。
- (24) 彼は香縄村(現高松市)出身で、もと戸長を勤めていた。大正三年に移住成功者として道庁から移民勧誘のため、香川県へ派遣されている(『殖民公報』第七八号、大3)。
- (25) 『北海道殖民状況報文』(注(23))。
- (26) 「無願開墾」とは殖民地解放以前に無許可(無願)のまま入殖し開墾することをいい、十勝国でみられた(榎本守恵「十勝における無願開墾の問題」、芳賀幸四郎先生古稀記念会編『日本社会史研究』笠間書院、昭55)。
- (27) 注(24)。
- (28) 『移住者成績調査』(注(23))。
- (29) 彼の経歴については、津森明「小西和」(『讃岐人物風景』第一三巻、四国新聞社、昭60)参照。
- (30) 小西農場の沿革については、北門新報(明27・9・22ほか)、道毎日(明28・7・14ほか)に記載がある(ともに海南文庫蔵)。また『栗沢町史』(昭39)にも記述がある。
- (31) 団体(結)移住は、明治二十五年十二月に道庁で策定された「団結移住ニ関スル要領」にもとづき、府県内から三〇戸以上が自作を目的に三ヶ年以内に移住した場合、一戸に付き一万五〇〇坪の区画地の予定存置を受けられる制度であった。府県から直接地所が取得できる便宜な制度であったために、二十六年以降はこれを利用した団体(結)移住が盛興した。しかしこれとても全移住数の五%程度であった。団体(結)移住については『新北海道史』第四卷(昭48)二三三頁以下参照。

- (32) 『北海道協会報告』第八号(明29)。入殖地は現在の東川町。『東川村史』(昭29)には二十八年から三十年迄までの入殖者名の記載がある。この中には七一人の香川県出身者がおり、そのうち三六名が三豊郡出身である。三豊郡でも高室村が一〇人、柞田村(ともに現観音寺市)が九人と両村で半数をしめている。
- (33) 『苦前町史資料』第三編(昭50)。
- (34) 『真狩村誌』(大3)。
- (35) 桑島又三郎等がペケレベツ原野に二〇戸分の予定存置をうけたという(『清水町五十年史』、昭28)。
- (36) 『雨竜町百年史』(注1)。
- (37) 全国レベルの北海道移住の動向に関する分析については永井注(6)論文、注(3)書参照。
- (38) 上記の点については、市原輝士・山本大『香川県の歴史』(山川出版社、昭46)、『角川日本地名大辞典—香川県』(角川書店、昭60)の総説、『香川県史』(第五巻、近代一、昭62)を参照。
- (39) 大川郡は県内で最も副業が発達していたとされるが(村上稔『東讃産業史』六七—頁以下、東讃産業史料保存会、昭58)、今後各郡の副業と移住の関係性についても検討の必要がある。
- (40) 桑原注(1)論文。
- (41) 『広島県史』近代一(昭55)。
- (42) 『殖民公報』第二四号(明38)、六一号(明44)。
- 補注 明治二十八年に石狩国上川郡鷹栖村ピップ原野にも、三野・豊田郡和田村外八ヶ村出身の六五戸(実際の入植は四四戸、団团长倉田好蔵)からなる讃岐団体が入植している(『石狩国上川郡団体移民概況』、北海道大学附属図書館北方資料室蔵)。